

あらえびす賞

それでも歩み続けていく

松原 健太

自分が選んできた道は決して間違いいではない。自信をもって進んでよいのだ。この楽曲を聴き終える度に、いつもそんなことを思う。

たとえばあの日、大学進学を機にふるさとの北海道を離れていなければ、どんな人生を送っていただろうか。たとえばあの時、今の職業を選ばなければ、どんな人生を歩んでいたのだろうか。あるいは、友人や恋人への言動。あるいは、幼少期の過ごし方。人生に答えはないとよく言うが、それでも時間には止まらずに進み続ける。だから、迷ってもその都度選択を迫られ、やがて振り返った時に、もしものことを考え、時には後悔すらしてしまうものではないだろうか。そんな時にはいつも、この楽曲がもつ力を借りるのだ。

冒頭、いわゆる提示部の第一主題。弦楽器が奏でる優美な旋律に、一気に引きこまれる。ところが、その直後に木管楽器と金管楽器が不安げな旋律を奏でる。これらの二つの旋律が音高を変え、さらに交互に出てくるところは、まさに自分の選択に対する自問自答のようで、自信と不安との葛藤を彷彿とさせる。その後も、かたちを変えながらこの旋律が何度も繰り返され、駆け引きが続いていく。やがて、それらを制止するかのごとく、低音の勇ましい音色によって、冒頭と同じ第一主題の旋律が演奏されるところは、不安を打ち消そうとする意志すら感じる。ここまでの一分強の段階でも、実に多くの魅力に満ち溢れている。聴き手を引き込み、決して飽きさせず、心をつかんで離さない構成。すばらしい作品だ。だが、物語はまだ終わらない。

この後、第二主題が登場するのだが、これもまた第一主題に負けないほど心をひきつけるもので、ノスタルジックであり壮大なのだ。私の生まれ育った北海道の広く果てしない大地と、そこに吹き渡る風を感じるこの旋律は、とりわけ私と同じような土地で育った者になら、いっそう共感してもらえるだろう。さらに、この旋律をオクターブ上の高音で奏で始め、その下で伴奏隊が軽やかなリズムを刻む部分では、心が不思議と開放的になり、体が無意識に揺れ、軽いトランス状態になる。第一主題での葛藤とは真逆で、全てが

解決したかのように感じられるのだ。だが、冒頭で述べた通り、人生に答えはない。この楽曲も、一度は明るい兆しを見せながらも、少しずつ翳りが出始め、再び第一主題に戻る。

このたった二つの主題となる旋律が、楽曲の中間にあたる展開部では音高を変えたり、演奏する楽器が入れ替わったり、フーガ形式を用いたり、様々にかたちを変えながら、人生のように終わることなく続いていく。

ところで、私は幼少期から父の影響でクラシック音楽に親しみをもってきた。クラシックだけではなく、ポップス、ジャズ、民族音楽にいたるまで、様々なジャンルを好んで聴いている。だが、この楽曲に限っては、曲の途中で終始感を一切感じさせないのだ。先述の通り、たった二つの旋律をつなぎあわせている楽曲であるのに、常に先へ先へと進み続け、止まる瞬間がない。ましてや、安心感を与えるような解決を感じさせるような音すら、なかなか出てこない。全体の構成としても、冒頭で述べた通り答えのない人生を表現しているように感じてならないのだ。

さて、楽曲は再現部へと戻る。再現部では、冒頭の提示部と同じ第一主題の旋律が明確なかたちで再び登場するのだが、オーボエとホルンだろうか。優しさと素朴さを兼ね備えた音色がゆったりと演奏するところは、人の老いを感じさせるものがあり、故に人生の終盤を彷彿とさせ、楽曲の進行と共に人生が経過したようにも思える。さらにもう一度、第二主題が訪れる。ここでは冒頭とは異なり、半音高く転調しており、その下を支える伴奏隊も金管楽器が目立つことで、力強さが生み出されている。まさに、長い人生を経て達観したかのである。そして楽曲はフィナーレへと向かう。最後は短調のまま、音楽的にも解決という感覚はないが、すべての楽器が揃って迫力のある音を奏でるところは、それでもなお自分の人生を歩み続けていく強い決意のようなものを感じる。

第一楽章はこれで幕を閉じるが、これに続く第二楽章、第三楽章、第四楽章も含めて、この楽曲は魅力にあふれている。特に第四楽章では、これまでに述べてきた第一楽章の主題が再び登場するのだが、第一楽章で引っぱり続けた葛藤を払拭するような、やっと解決の兆しが見えるような構成が実に憎い。そして調べたところ、このような楽曲構成を循環形式と呼ぶらしい。人

生も循環形式。止まらない時間の中で迷って、悩んで、選んで、振り返って、もがいて。それでも進む。私の人生、まだ四十年。されど、もう四十年。私はこれまでも、これから、この楽曲の力を借りて、一歩ずつ歩み続けるのだらう。

曲名 交響曲第1番 ト短調  
作曲 ヴァシリ・カリンニコフ

## 審査員講評

あらえびす賞感想文について

音楽鑑賞は、音楽とそれを受け止める自己との対話でもあります。そして、人生を共に歩んでくれる音楽との出会いは何物にも代えられません。そんな楽曲について、折々に聴き返しながら洞察を深めている様子が伝わってきます。

教育長賞

母へのレクイエム

中村 暁代

ブラームスのドイツレクイエムと出会ったのは、十五年前の事だった。今は亡き母とその年の春先の昼間に共にテレビを見ていた。

オーケストラによるブラームスのドイツレクイエムの一部を初めて聴く。五歳の時からピアノを習い、音楽高校、大学に通った私は、クラシック音楽の番組が好きだ。そのオーケストラの指揮者は立っているのもやっとだ。

七十三歳のその男性指揮者は、癌の治療を受けながら、演奏活動をしている。「癌の事は主治医に任せる。ブラームスは僕の音楽の原点だ。ドイツレクイエムは僕の為の鎮魂歌だ」と静かに、しかし力強く彼は言った。

オーケストラ団員や音楽家らの多くの人達と一つの曲を作り上げる醍醐味も語る。私も音楽学校時代、合奏部に入り、決して上手とは言えないバイオリンを弾いており、感じる所がある。一人でピアノを弾くのも幸いだ。彼の真摯な指揮に、オーケストラ全体がまとまってく。演奏を聴く私も、いつのまにか曲のメロディーを鼻歌で歌っている。人はいつか死ぬ。死は不幸事や悲しみの対象と思われがちだが、この曲には希望が感じられる。

死は終わりではないと言っているかのような。通常レクイエムはカトリック教会において死者の安息を神に願う典礼音楽の事であり、ラテン語の祈禱文に従って作曲させる。この曲には作曲家独自の人生観が現れている。

ハンブルクで生まれ、ウィーンで没したブラームスはルター信徒であるが、ルター聖書のドイツ語版の文言から、ブラームス自身が選んだ旧約聖書と新約聖書のドイツ語章句を歌詞として使用する。生者の為の鎮魂歌だ。

テキストは人間の苦悩や儚さ、働きと忍耐、そして慰めと報いと喜びを表現する。この曲を知る十数年前からキリスト者であり、高校や大学でドイツ語を習い、その後も独学していた私のこの曲への興味は深まってく。

後にこの曲を全部聞きたいと思い、CDや楽譜を買い、自分でも歌ってみる。演奏時間は一時間強。家事をしながらこの曲のCDを聞く。全体は七つの曲からなり、第一〜三曲は次第に力を増す。第四、五曲は安らかだ。

第六、七曲で激動から静に戻る。三群のアーチ構造である。第一曲では、低音の鼓動に支えられ徐々に立ち上った序奏コラルが又もやの中に沈んで行くと、雲間から光が射す如く合唱が、祝福されたると呼びかける。

序奏の一節が繰り返された後、この動機はマタイ福音書「祝福されたるは、悲しみを負う人」の歌になる。パレストリーナ風の対位法による美しいアカペラが、母を天に送って悲しむ私の心を優しく包み込むようだった。

この曲をテレビで母と聞いた二ヶ月後、母は突如として左半身が麻痺した。検査入院の結果、肺や脳に腫瘍ができていた事がわかり、余命四ヶ月と宣告された。母の奇跡的な回復を望み、ビタミンCの点滴を受けさせる。

癌の治療法としては副作用がないものとされていた。それも虚しく母は宣告された余命の期間を生きて他界した。享年六十三歳。高齢化社会ではまだ若いようにも思えた。暫くは在りし日の母を思い出しては涙を流した。

ドイツレクイエムは、ブラームスの恩人シューマンが死去した事がきっかけで構想され、ブラームスの母の死去がその製作を急がせたそうだ。今から百数十年前に作曲されたこの曲が母の為のレクイエムにも思えてきた。

第六曲では、思いつめたような合唱が「われらここに永遠の地を持たず」と歌い始める。バス独唱の「見よ、あなたがたに奥義を話しておく」から音楽は厳しさを増してゆき、復活と再生の時の劇的な描写に突入する。

「我らは全てが眠るのではなく、突然、瞬く間に、最後のラッパの時に全く変えられる。死者は蘇り朽ちぬ者となる」この歌詞の中の「死者」には召天した母や将来召される私も入っているのかと思うと、胸が熱くなる。

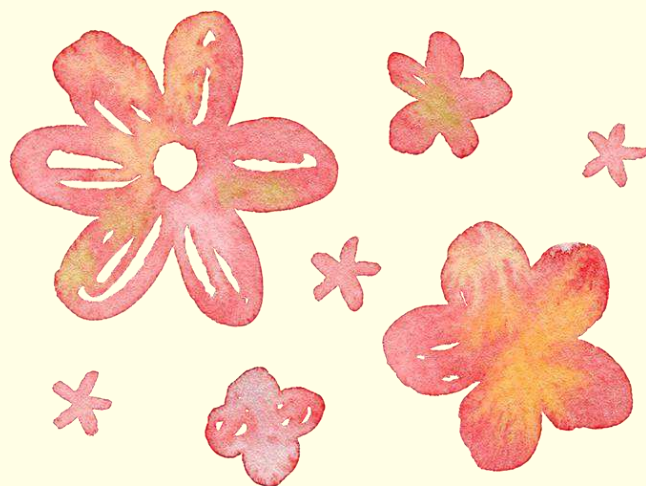
母も病が進む中、キリストへの信仰を告白し、私と共に教会に行くようになり、容態が急変し、病院に搬送される数時間前に受洗した。病で弱って滅びた母の体の蘇りはどれ程栄光に満ちた物になるかと想像を働かせる。

更にこの曲で死に打ち勝ち、「どこにあるのだ、お前の勝利は？」と歌われる。神の言葉は何と力強い事か。病院に搬送された翌日の朝に他界した母に手を置き、「死は勝利に呑み込まれた」と宣言したのを思い出した。

第七曲では「祝福されたるは死者。主の内にあって死ぬ人。彼らは労苦から解き放たれる。彼らの成した事は後ろについてくる」と歌われる。母は世を去る事で、苦悩の多い人生からやっと自由になったのだと思う。

その労苦は報われているか。母の遺影を見る度にドイツレクイエムがどこからか聞こえてきそうな気がする。第一曲の最初が回顧され、円環が閉じるように、祝福されたるはという響きの中で第七曲は静かに消えていく。

曲名 ドイツレクイエム  
作曲 ブラームス



優秀賞

影の主演 運命のピアノ

田中 典子

「G線上のアリア」、多くの人が聞いたことのある馴染み深い曲だ。バイオリンのために編曲された楽曲だが、私は弦楽四重奏で聞いたピアノの音色に圧倒され、何年経ても忘れられない。

その音色とは、私が勤め先で担当していた弦楽四重奏の演奏会で出会った。当時、企業では社会貢献活動の一環として、そして演奏家の方々は、趣旨を理解いただいた有志の方によるボランティア参加によるものだった。ここでは、日ごろ生の音楽に触れることの難しい、例えば入院している患者さんの病院などへプロの演奏家（交響楽団の団員）が出向き演奏するだけでなく、事前の準備を万全にしてくださる。例えば、演奏曲目は会場に合った曲、子ども病棟ではアニメの楽曲、成人患者の病棟では「ふるさと」など全員で口ずさめるもの、そして最後に「星に願いを」と闘病生活を応援してくれる心の通う楽曲といった具合だ。この演奏会では、同じ演奏曲目であっても同じメンバーが演奏することはない。私自身は何回か「G線上のアリア」を聴いているが、当日の聞き手側の心情や、会場の雰囲気により受け取り方が異なるため、演奏会ごとに感慨深く、音楽の面白さを改めて感じる。そして、あくまでも私見で恐縮だが、弦楽器に限らず何となく女性演奏家のほうが見た目、そして音色も大胆で力強いパフォーマンスの印象を受ける。

私にとって運命の日の会場は、入院患者さん家族に宿泊施設の提供を行う小さなお寺の本堂であった。元来、お寺の本堂は音を響かせる設計となっていることもあるが、何と言っても残響のある綺麗な音が印象に残る。「G線上のアリア」は、静かにスーと、ゆっくりと耳に馴染みながら始まるが、この会場ではコンサートホールとは趣が異なり、畳が音を優しく包み込む感覚に陥る。心に音が染み込み始めると、不協和音が聞き手の心に何とも言えない悲しみや不安定な気持ちを投げかける。しかしながら、決して寂しい気持ちにはならない。それは音に起伏はないが淡々と曲が進み、最後は落ち着いた和音で終わるからである。

当日、私は無防備でいた。もちろん仕事の一環であるため緊張感をもって会場の整備などをしていたのだが、ビオラの音が出た瞬間、眼が見開いたことを今でもしっかりと覚えている。そして、曲の各箇所バイオリンを引き立てるビオラニストの心のこもった演奏がズンズンと突き刺さってくる。こんなにもビオラが役者のように場面ごとに立ち回り、時にわき役に、そして少し主役になるなんて。この瞬間から私にとってビオラは、影の主役であると思わざるをえない。この深みある音色を「美しい」と単純な表現だけでは満足できないが、現在私が持ち合わせる表現できる言葉として最も適切だ。

生の演奏会は演奏家の息遣いまでが聴こえ、そして見ても楽しめる最もお勧めしたいものだが、私たちはテレビ、ラジオや様々な方法でいつでもどこでも素晴らしい演奏の機会を耳にすることが出来る。

ぜひ、同じ曲目でも自身の状態など環境が異なれば、新たなる印象を持たれると確信している。みなさん、一緒に楽しみましょう。

|    |                 |
|----|-----------------|
| 曲名 | G線上のアリア         |
| 作曲 | ヨハン・セバスティアン・バッハ |